

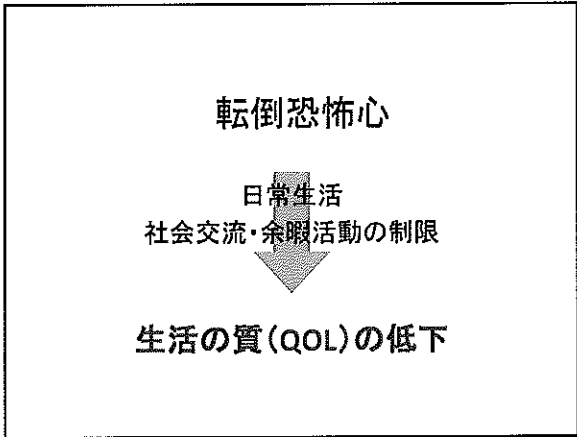
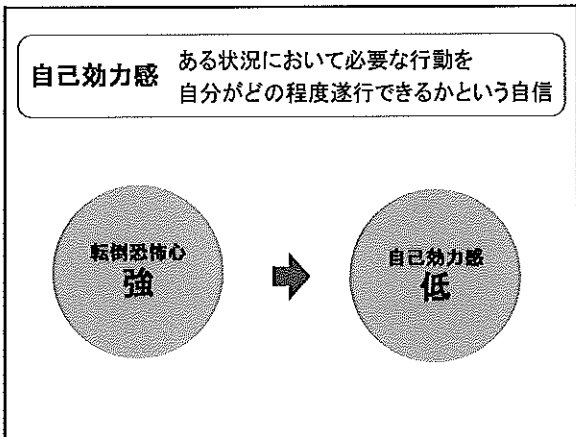
回復期病棟における運動器疾患患者の  
転倒恐怖心と歩行自立度との関係

あいちりハビリテーション病院  
理学療法士 古川雄一  
理学療法士 小松洋介

はじめに

転倒恐怖心

身体能力が残されているにもかかわらず、  
移動や位置の変化を求める活動を  
避けようとする永続的な恐れ  
(Tinetti)



目的

転倒恐怖心の研究は地域在住高齢者や  
施設入所者を対象としたものが多い

回復期病院における  
転倒恐怖心と歩行自立度の関連を調査

対象

- 転倒により下肢または脊椎骨折を呈した患者  
15名(男性3名、女性12名、平均年齢78.3±13.1歳)
- 転倒恐怖心があり、研究内容を理解でき、  
10m歩行、手放し立位保持が可能な者
- 対象者に倫理的配慮と本研究の概要を説明、  
同意を得た上で本調査を実施

### 方法

- **Modified-Falls Efficacy Scale(M-FES)**  
14項目からなる活動を転倒することなく行う自信の程度を測定  
0点(全く自信がない)～ 10点(完全に自信がある)  
点数が高い程、転倒恐怖心が低いことを示す
- **機能的自立度評価表(FIM)**  
M-FES検査日時点での歩行項目点数(1～7点)

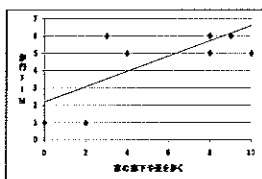
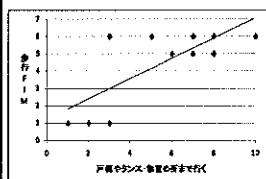
### 統計学的解析

#### 転倒恐怖心と歩行自立度との関連

M-FES下位項目それぞれと  
FIM歩行項目点数を  
Spearmanの順位相関係数を用いた

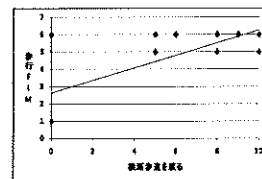
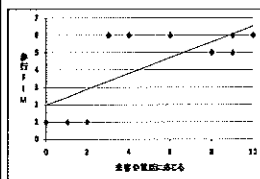
### 結果(強い正の相関)

棚やタンス・物置きの  
所まで行く( $r=0.76, p=0.002$ )      家の廊下を歩く  
( $r=0.74, p=0.004$ )



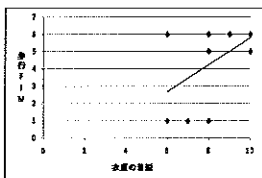
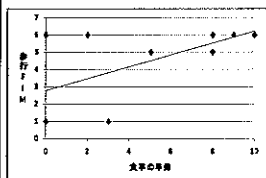
### 結果:強い正の相関

来客や電話に応じる  
( $r=0.74, p=0.004$ )      横断歩道を渡る  
( $r=0.72, p=0.006$ )



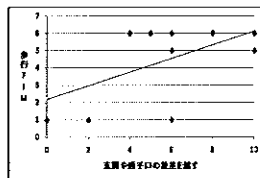
### 結果:中等度の正の相関

食事の準備  
( $r=0.62, p=0.023$ )      衣服の着脱  
( $r=0.56, p=0.046$ )



### 結果:中等度の正の相関

玄関や勝手口の段差を越す  
( $r=0.58, p=0.039$ )

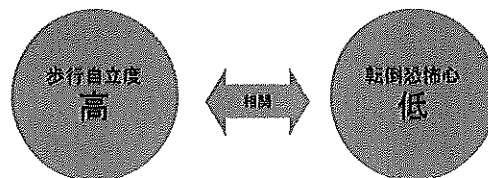


**結果:有意な相関を認めない**

- 「風呂に入る」
- 「布団に入る、起き上がる」
- 「椅子に掛ける、立ち上がる」
- 「軽い家事を行う」
- 「軽い買い物に行く」
- 「バスや電車を利用する」
- 「庭いじり、洗濯物を干す」

**考察**

転倒恐怖心と歩行自立度の関連



**先行研究:ADL訓練による転倒恐怖心の軽減検討**

M-FESの評価結果を基にしたADLおよびIADL訓練が入院患者の転倒恐怖心に与える影響を検討。

転倒恐怖心のあるADL動作に対して  
 ADL訓練介入群 → M-FES,ADLともに向上  
 ADL訓練非介入群 → ADLのみ向上

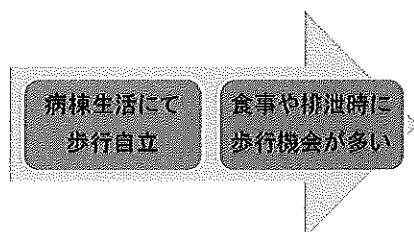
(ADLおよびIADL動作が転倒恐怖心に与える影響 鈴木ら)

**先行研究:ADL訓練による転倒恐怖心の軽減検討**

より多くの成功体験と正のフィードバック効果をもたらす言葉がけを与えることで、転倒恐怖心が軽減された可能性がある。

(ADLおよびIADL動作が転倒恐怖心に与える影響 鈴木ら)

**本研究**



転倒せずに歩行可能であった機会が多い



歩行に関連する動作の転倒恐怖心が低い

「布団に入る、起き上がる」  
「椅子に掛ける、立ち上がる」に  
相関がみられなかった

本研究の対象者：  
10m歩行、手放し立位保持が可能な者

布団に入る、椅子に掛ける動作は  
対象者にとって難易度が低く  
日常的に行っていた



患者すべてに転倒恐怖心が低かった

## 結論

- 転倒恐怖心を有すると  
たとえ身体機能が残されていても  
日常生活における活動量の低下の  
恐れがある
- ADL動作が自立であっても  
転倒恐怖心に対する  
評価とアプローチを行う必要がある

## 参考文献

- 1) Tinetti, M. E., Powell L. Fear of falling and low self-efficacy : A cause of dependence in elderly persons. J. of Gerontology, 48:35-38,1993
- 2) Bandura A. Self-efficacy mechanism in human agency. Am. Psychologist, 37:122-47,1982
- 3) 柴田 博、芳賀 博ほか編. 老年学入門. 東京, 川島書店, 1993
- 4) Lachman ME, et al. Fear of falling and activity restriction : The Survey of activities and fear of falling in the elderly (SAFE). J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci 53:43-50,1998
- 5) Yardley L, et al. A prospective study of the relationship between feared consequences of falling and avoidance of activity in community-living older people. Gerontologist 42: 17-23,2002
- 6) 鈴木 賢, 他: Fall Efficacy Scaleの評価結果をもとにしたADLおよびIADL訓練によって入院高齢患者の転倒恐怖感を軽減できるか. 理学療法科学, 2010, 25(6) :987-994.

ご清聴ありがとうございました